

住民問題」の一部と考え、それが最も先鋭的な形で顕在化したのが南アであり、原住民居留地と白人入植地の問題は程度の差こそあれ南ローデシアやケニアなども共通する問題とするならば、フィランソロピストの間で協力関係を構築する動きに結びついたのではない。南アの協議会は、イギリスの ASAPS やアメリカのフィランソロピー団体に比べると、前者の見方が強かったのだろうか。

さらにいえば、イギリスとフランス、ベルギー、ポルトガルなどアフリカ植民地保有国の間でトランスインペリアルなフィランソロピー・ネットワークが存在したかについても知りたいところである。ちなみに第二次世界大戦後のサハラ以南アフリカでは領土横断的な科学者ネットワークが形成され、人的交流や共同研究が活発になっていた。<sup>2)</sup>このようなトランスアフリカン・ネットワークを視野に入れることで、新たに見えてくるものはないだろうか。

本書は 19～20 世紀転換期から 20 世紀前半までのイギリスと南アを分析対象とし、そこで人道主義がどのような形で顕在化したかを明らかにした実証研究である。同時に、今日の世界の貧困や人種差別をめぐる問題を考えるうえで多くの示唆を与えてくれる一書でもある。研究する地域や時代を超えて幅広い読者が本書を手取ることを願ってやまない。

## 引用文献

- Anker, Peder. 2001. *Imperial Ecology: Environmental Order in the British Empire, 1895–1945*. Cambridge: Harvard University Press.
- 水野祥子. 2020. 『エコロジーの世紀と植民地科学者—イギリス帝国・開発・環境』名古屋大学出版会.

有井晴香. 『それでも、彼女は学校へ—エチオピア村落の教育とジェンダー』風響社, 2025 年, 264 p.

高村（井上）満衣\*

小学校に通うものは通常、子どもであることが想定され、「児童」とよばれる。しかし、本書のフィールドであるエチオピア南西部に位置するマーレの村では、出産を経験した女性、母親が子どもとともに就学している。そのため、本書では小学校に通う人々を「生徒」と称している (p. 6)。現代アフリカにおいても、学校教育というシステムは、社会に浸透しているが、この地域では既婚者や母親が学校に通い続けている。そうした社会で生きる女性たちにとって、学校に通うことはどのような意味をもつのだろうか。

本書は、教育の機会を得ることが困難とされてきたエチオピアのマーレ社会において、既婚女性が学校に通うという現象に着目し、ライフストーリーを通じて教育の多義性や女性の主体性を描いた民族誌である。本書は、筆者の博士論文を改稿したものであり、補足

2) [水野 2020 : 第 7 章].

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

調査による情報も用いられている。

本書の目的は、「アフリカの女性が、家父長制的な社会構造のなかで自らの生をいかに価値あるものとして紡いでいくのか。そこに学校教育の普及がどのように関わっているのか明らかにするものである」(p. 15)。そのために「就学を含むライフコースにおける意思決定のプロセスを検討し、女性がいかにして自律的な主体になるか」(p. 15)が考察されている。以上をふまえ、章構成にそって各章を概説する。

序章「アフリカの女性の生き方と学校教育」では、筆者のスタンスが示されている。本書の目的とともに、西洋的な見方によって、アフリカの女性を一律に「抑圧された」存在として位置づけてしまうことへの疑問が提示される。本章では、女子教育やアフリカの女性の自律に関する先行研究が紹介されている。加えて、筆者はアフリカの女性の自律性を捉え直すため、他者との関係性によって自律がもたらされる「関係的自律性」という理論的枠組みの必要性が論じられている。本書では、「自律性を確立することは、他者との関係性のなかで個人が自身の生き方を価値あるものとして是認することを含めるものとして捉えられる」(p. 31)と言及される。

第1章「変わりゆく村」では、調査地の地理的情報、社会制度、宗教について記述される。マーレでは高地をアレ (*ale*)、低地をダウロ (*dawlo*) と区別し、この区分は生業形態・居住形態、社会文化的な要素にも関わってくる。高地のアレはプロテスタント信仰と学校教育が浸透した「近代的」な社会、

低地のダウロは、「伝統」が残る「伝統的」社会と語られている。また、在来宗教からプロテスタントへ改宗した経験の語りが描かれ、信仰の広がりと学校教育の普及の関連が示される。

第2章「教育開発の展開」では、エチオピアの教育政策をふまえつつ、マーレ社会における学校教育の展開と人々による意味づけの変遷が示される。公教育の普及や女性の参加を可能にした成人教育について述べられる。その一方で「学校教育が形骸化している側面」(p. 90)が指摘される。また、「学んだ人」と「学ばなかった人」という差異の形成が言及され、後章で紹介される女性の生き方に大きく関わっていく。

第3章「進学か結婚か」では、進学と結婚に関する女性たちの選択や、就学を支える環境が論じられる。女性は学校を卒業後に就職してから結婚という順序が理想として語られる。だが、調査によればほとんどの女性がこの順序に沿っていない (p. 101)。結婚・出産を経験してもなお、女性たちは就学を続けていた。筆者が調査をはじめた2010年頃は、就学への期待が通学動機のひとつとなっていた。しかし、2018年には雇用が十分に確保されるとはいえない状況にあり、今後の就学状況の変化が筆者により予想される (p. 110)。

第4章から第6章では、子ども時代に学校教育を受けられなかったが、それぞれの形で学校教育を求める女性のライフストーリーが、関係的自律性に着目しながら描かれる。第4章「女性性の再構築—娘を学ばせた女

のライフストーリー」では、女子教育がそれほど浸透していなかった時代に 8 人の娘を学校に通わせた 60 代女性オーコの事例が取り上げられる (p. 117)。オーコは、自身の娘が理想的な女性の生き方をしており、それに対して自身は「愚かな女」とであると評価している。これを筆者は、オーコが自身を客観視することで、彼女の自律性が構築されていると論じている。

第 5 章「時代による差異のはざまで一女性教員のライフストーリー」では、オーコの次女である小学校教員ブリトゥの事例が取り上げられる。彼女は「学んだ人」の先駆者であり、彼女の語りと観察データから「愚かさ」をどのように捉え、生き方に反映させているのが論じられる (p. 141)。教育が新たな差異を生む一方で、その差異を引き受けながら生きる女性の姿が浮かび上がる。

第 6 章「結婚後の就学—学校に通う母親たちのライフストーリー」では、学校に通う既婚女性のライフストーリーに焦点が当てられる。教育開発の文脈において、女性就学を阻む要因とされている結婚・出産を経験しながら、なぜ、マーレの女性は学校に通い続けるのだろうか。彼女たちの結婚と就学に関する意思決定のプロセスから、彼女たちの自律性のあり方を考察していく。小学校で学ぶ「おとな」は女性に限らない。事例として挙げられた男性は、子どものときに就学歴があり、明確な目的をもって、復学していた (p. 179)。一方、既婚女性は、ほとんど就学歴がない。識字教育を受けたことにより、学校教育に興味をもち就学する場合もあるが、

これまでの人生経験と就学選択を関連づけて語る女性は少ない。3 人の女性は共通して、比較的「若い」段階で結婚していた。彼女たちは結婚の選択をした理由について「子ども」だったから十分な責任・判断能力を伴わなかったとの内省が見受けられる (p. 221)。ひとりは、学校教育を勧める夫や義母との関係性を調整するために就学という手段をとっている。一方、夫や親族からの協力が必ずしも受けられるとは限らず、夫から反対されながらも、成人教育をきっかけに小学校へ入学し、「学ぶこと」を求める女性もいる。

結論「教育を求める女性たちの関係的自律性」では、女性たちの語りが「語り尽くせない」物語の断片だと筆者は主張する。語りは「過去と未来を結ぶ行為」であり、「自らの経験を社会のなかで位置づけ、価値づける行為」である (p. 228)。また、「沈黙する」という行為が必ずしも自律性を損なうとはいえず、自律性の発揮に繋がることもあることが指摘される。筆者は「沈黙する」文脈を 3 つに分類し、マーレ社会に存在する「愚かな女性／賢い男性」「学ばなかった人／学んだ人」といったジェンダー化された二項対立的なカテゴリーについて言及している。このように、マーレ社会にはさまざまな二項対立カテゴリーがある。女性たちはそれらの枠組みを用いながらも、単一的なストーリーではなく、そのあいだを揺れ動く姿が示されている (p. 231)。そして女性たちは、他者との関係性のなかで自らの脆弱性をみとめつつ自らの人生をいかに意味づけるか模索していく。筆者はこの動きこそが、女性の自律性に繋がっ

ていると唱える (p. 232)。最終的に、教育政策の動きと女性の「自律的な生への希求」が複雑にからみ合うことで、マーレ社会において、既婚女性を含めた女子教育が普及したと結論づけている。

以下では、評者として本書の気になった点を挙げてみたい。第一に、アフリカにおける女子教育を「関係の自律性」から捉える視点は、これまで抑圧された対象としてみられてきた女性を捉え直すことに繋がるだろう。この点において学術的貢献が大きいだろう。それと同時に、筆者が主張するマーレ女性の自律性では、必ずとも「愚か」でいなければ自律性は保たれないのだろうかとの疑問が浮かぶ。これから学校に通う女性、「学んだ人」が増えてもなお、社会的に女性は脆弱な立場は続くのだろうか。第3章でこれからの就学の変化が指摘されているように、マーレ社会における学校教育の揺らぎのなかで、同社会の文脈において女性の自律性がいかに変容していくかは、今後の課題である。第二に、筆者は「学校に通うこと・学ぶこと」に価値が置かれていると述べるが、学びの場は学校に限定されず、日常生活にも存在するはずである。なぜ、「学校」でなければならないのか、より具体的な議論が望まれる。最後に、結婚・出産を経験した女性が学校教育を積極的に継続できるという点は大変興味深い。就学希望が叶うためには学校側の体制や家庭の支援が不可欠であり、マーレ社会にその環境が整っていることは注目に値する。もっとも、「学校に通うこと」を家父長制的社会構造への抵抗とみなす議論 (p. 222) には慎重さが

求められる。なぜなら、少女や母親が学校に通うことによって免れる家事・育児は、義母や年少の子どもといった他の女性に委ねられているからである。この点は、「抵抗」が同時に家父長制の再生産に寄与する可能性がある。このようなある女性の「抵抗」が別の女性（女子）の負担に支えられるという二重性をどう捉えるかは、今後の教育とジェンダー研究にとって重要な課題である。本書は、ライフストーリーという女性たちの分厚い語りという詳細な記述とコラムにより、読み進めるとフィールドにおける生活が目浮かぶ。だからこそ、彼女たちの語りが、問いに対して、はっきりとした答えがない場面がある。その曖昧さこそが、現地における複雑さを表しているといえる。結婚や出産を経験した女性が学校に通うという現象を丁寧に取り出し、教育の多義性と女性の自律性を浮かび上がらせた本書は、教育研究者、ジェンダー研究者、地域研究者に是非一読してほしい民族誌であり、今後のアフリカ地域研究における女子教育論の重要な参考となるだろう。

師田史子. 『日々賭けをする人々—フィリピン闘鶏と数字くじの意味世界』慶應義塾大学出版会, 2025 年, 392 p.

劉 振業 \*

本書は、著者によるフィリピン南部・ミンダナオ島の人々（「賭博者」）の日常的賭博実践を繊細に記述したものである。闘鶏と数字

\* 立命館大学環太平洋文明研究センター